

※ この資料には、2月10日の成果報告会での発表資料に
新たな参考資料を付け加えています。



文部科学省
令和4～6年度 幼保小の架け橋プログラム事業

成果報告会

京都市教育委員会

- 1 京都市の現状と研究体制
- 2 3研究ブロックの概要
- 3 京都市のアンケート調査
- 4 京都市の方針
- 5 京都市の取組(R4～6年度)
- 6 京都市「架け橋期のカリキュラム」例
- 7 京都市 幼保小の架け橋プログラムの手引き
- 8 成果と課題
- 9 全市実施に向けて今後の展望（持続可能な取組にするために）

参考資料



1 京都市の現状と研究体制

京都市の現状

京都市 幼保小の架け橋プログラム手引き P4より

京都市の市立小学校・就学前施設の数(令和6年度現在)

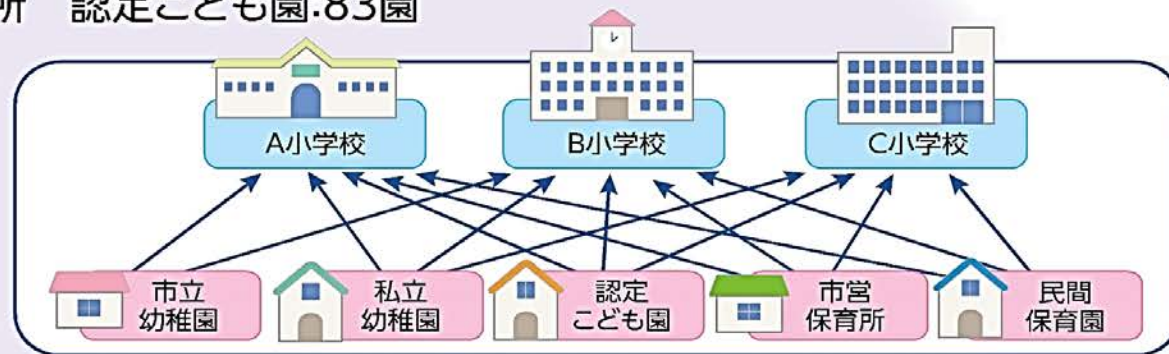
市立小学校:150校 義務教育学校:8校 私立幼稚園:81園 市立幼稚園:15園

民間保育園:196園 市営保育所:13所 認定こども園:83園

幼保小連携・接続の推進を阻む物理的要因

就学前施設から**平均10校へ進学**

小学校には**平均19園から入学**



⇒ 地域ぐるみで進める教育

現在のコミュニティと様々な地域実態

- 本市では小学校区が地域活動の基礎
- 全小学校及び市立幼稚園に学校運営協議会を設置
- 様々な地域実態
 - ・学校の所在地…市街地、郊外地、山間部など⇒人口規模に違い
 - ・小学校・園規模…児童数(20名程度～1000名程度)、園児数に違い

コロナ禍による交流の中断

- ・全市立小学校での取組推進の必要性
- ・全市一律のカリキュラムで進めることは現実的ではない

1 京都市の現状と研究体制

教育委員会
(管轄)市立小学校・市立幼稚園

連携

子ども若者はぐくみ局
(管轄)私立幼稚園・認定こども園・民営保育園・市営保育所

カリキュラム開発会議

京都市架け橋会議

構成メンバー:有識者 各種団体の代表 保護者 研究ブロックの代表 等

協議・取組内容

- ・モデル地域3ブロックにおける架け橋期のカリキュラム作成や実践研究についての検討・助言
- ・架け橋プログラムの普及に関する研修等の検討・助言
- ・京都市としての支援策などの検討 等

3研究ブロック(R4~)

御所南小
ブロック

下京雅小
ブロック

竹田小
ブロック

11実践研究校(R5~)… 明德小・乾隆小・朱雀第一小・
翔鸞小・陵ヶ岡小・西野小・嵐山東小・醍醐西小・
伏見板橋小・久我の杜小・向島秀蓮小中

京都市の幼保小の教員・保育者への 研修と保護者啓発

(子ども若者はぐくみ局や教育委員会、子育て支援
総合センターこどもみらい館が協働)

- ・架け橋プログラムの理解
- ・幼児教育と小学校教育の相互理解と
質的向上
- ・小学校就学前の保護者への発信 等

研究ブロック・実践研究校の取組・成果を京都市全体に発信・普及

2 3研究ブロックの概要

御所南小ブロックの架け橋期のカリキュラムは、参考資料1・2参照

御所南小ブロック…大規模小学校とその地域にある入学者の多い幼児教育施設3園

研究主題…「ひと・もの・ことを大切にして 未来に輝く子どもの育成」

～感じ 考え 思考する そして 論理的思考へ～

- ・幼保小とも研究主題に明示された「思考力」に着目してカリキュラムを作成
- ・思考力を育む教師の関わりと環境構成に着目



「あきみつけ」でそれぞれが思考しながらつくった楽器をみんなに紹介している。



電車ごっこの中で使う路線図をどうやってつくるか、友達と共に思考している。



ピオトープの生き物をみんなで見て様子を想像し、様々に思考している。



友達の万華鏡を自分でもつくりたいと思い、試行錯誤しながら思考してつくっている。

子ども同士の交流



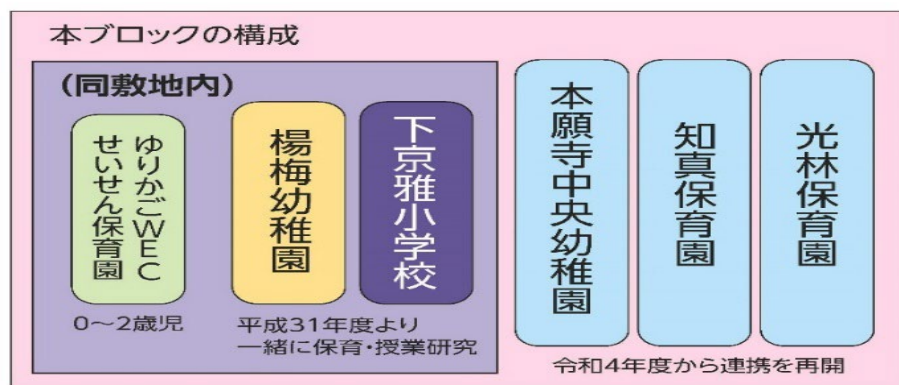
大人同士の交流・ 架け橋期のカリキュラムの作成・検討

※文中における「子供」の表記は、京都市において「子ども」に統一しているため、以降全て「子ども」と記載しています。

2 3研究ブロックの概要

下京雅小ブロックの架け橋期のカリキュラムは、参考資料3・4参照

- 下京雅小ブロック**…同一敷地内にある中規模小・公立幼・小規模保育施設と地域にある幼児教育施設3園
中心となる共通の視点…「**すすんで学ぶ**」「**楽しくかかわる**」「**自分でできる**」
- ・5歳児と1年生の1年間を大きく3期に分け、それぞれの期の発達のつながりを意識
 - ・子どもの姿や教師の関わり、環境に着目してカリキュラムを作成



活動内容

(1) 5歳児を小学校へつなぐ

入学式

児童机やイスは置かず、
カーペットを敷いて
遊べるように。



安心

スタートカリキュラム

半日入学でも

就学前施設の教員と
協力し、教室を就学
前施設に近い環境に



(2) 保育者と授業者をつなぐ

公開保育・授業の事後研修会



直接、思いを伝え合う

相互理解を深める

子どものために

「つながり」を意識した
よりよい「遊び」「学び」の実現

『違う』が当たり前!
『違う』を受け入れる!

合同研修会

交流の打ち合わせ



2 3研究ブロックの概要

竹田小ブロックの架け橋期のカリキュラムは、参考資料5・6参照

竹田小ブロック…中規模小学校とその地域にある公立幼稚園と公営保育所

期待する子ども像…「**夢に向かい、つながりの中で主体的に生きていこうとする子**」

- ・幼保小での長年の交流が基盤
- ・地域や保護者の実態から「家庭との連携」を重要な視点としてカリキュラムに反映



京都市 幼保小の架け橋プログラム手引き P48より

④公開授業・生活科1年生「いきものとなかよし」10月20日

話し合い① 生き物の説明の仕方について

小学校教員

6月に見た保育で、5歳児の子どもたちが自分の言葉で話していたので、それを目指したいけれど…

教師側も、子どもたちが説明の紙を持っていると、困っている時に援助しやすいので、安心なんですよね。

小学校教員

紙を持たずに発表することにしよう。不安な子どもは、話すポイントを書いた紙をもつことにすれば、安心できるかな。



自分の言葉で話すことで、相手を意識して、発表する側も聞く側も意欲が向上!!

小学校教員

自分たちが、捕まえた生き物や、身近にいるもののほうが、興味がもてますね。大切に育てることで愛着も湧いてきますね。

原稿を読まず、自分の言葉で話すことで主体性がUP!

話し合い② 生き物について

身近な生き物に思いをもって関わることで主体性がUP!

合同指導案検討会

子どもが主体的に学習するための援助について、指導案や幼児期の生き物との関わりについて話し合う。

幼保保育者

生き物の説明を書いた紙を持つと、読むことに必死になっている姿があった。

でも、生き物を介して自然に説明する姿がありましたよ。



幼児期でも、だんご虫やバッタなどを捕まえたり、蝶を羽化させたりして育てる経験をしていますよ。

幼保保育者

3 京都市のアンケート調査

研究ブロック R4～6年度 3ケ年

時 期 毎年 11月後半 実施

対象者 小学校 担任・教務主任・養護教諭

栄養教諭・管理職

幼児教育施設 全教職員

○アンケート調査項目

設問5 幼保小連携・接続には何が重要か

設問6 上記の理由（記述）

設問7 幼児教育施設（または小学校）にとって
幼保小連携・接続には何が重要か

設問8 上記の理由（記述）

設問9 幼保小連携・接続をすることで、
教員（または保育者）に期待できること

設問10 幼保小連携・接続をすることで、
子どもに期待できること

設問11 取組をして、教員（または保育者）にとって
良かったこと

設問12 取組をして、子どもにとって良かったこと

設問13 取組をして困ったこと、悩んだこと

設問14 幼保小連携・接続を進めるために知りたいこと
（記述）

設問15 子ども同士の交流で有効なこと（記述）

実践研究校と全市小学校 R5～6年度 2ケ年

時 期 毎年 12月上旬 実施

対象者 小学校 管理職（1校1回答）

○アンケート調査項目

設問⑩ 今年度実施した幼保小の連携・接続の取組（複数回答）

設問⑪ 今年度のスタートカリキュラムの内容（複数回答）

設問⑫ スタートカリキュラム実施期間（1項目選択）

設問⑬ 各校のフェーズ（1項目選択）

設問⑭ 来年度、特に重点的に実施したい連携・接続の取組
（3項目選択）

設問⑮ どのような情報提供や研修会・取組が必要か
（3項目選択）

設問⑯ 幼保小の連携・接続の効果を実感している点（複数回答）

設問⑰ 教員にとって良かったことや変化（複数回答）

設問⑱ 子どもにとって良かったことや変化（複数回答）

設問㉑ 取組をより充実・推進する上での課題や問題
（3項目選択）

※設問⑩～⑮は、全市小学校（研究校・実践校含む）対象、設問⑯～
㉑は、実践研究校と研究校14校を対象に実施。

3 京都市のアンケート調査（設問10 実施した幼保小の連携・接続の取組内容）

（設問10）

今年度、幼保小の連携・接続についてどのような取組をしましたか。（今年度末までに実施を予定している取組を含む）
（複数回答可）

- | |
|---------------------------------|
| ①入学前の新1年生、または入学後の1年生の情報共有 |
| ②小学校に安心感や期待感を持てるような半日入学の実施 |
| ③入学後のスタートカリキュラムの実施 |
| ④共通の視点や目指す子ども像などの共有のための会議 |
| ⑤幼保小の取組に関する年間計画等についての日程調整会議 |
| ⑥幼保小での教育内容・保育内容についての会議・研修会 |
| ⑦幼児期の育ちや学びを意識した授業実践 |
| ⑧幼児教育施設向けの公開授業 |
| ⑨幼児教育施設の保育参観 |
| ⑩公開授業・保育参観後の協議研修 |
| ⑪教員と幼児教育施設の保育者との合同研修 |
| ⑫自校の教職員対象の「幼保小の連携・接続」に関する校内研修 |
| ⑬子ども同士の交流（5歳児と1年生） |
| ⑭子ども同士の交流（幼児と小学生） |
| ⑮交流の事前・事後協議 |
| ⑯学校行事への幼児教育施設の参加・参観（保育者または園児） |
| ⑰幼児教育施設の行事への小学校の参加・参観（教員または小学生） |
| ⑱学校だより等の配布物の交流 |

3 京都市のアンケート調査(R5アンケート結果より)

京都市の架け橋プログラムに関する調査結果(R5.11月実施)

	令和5年度の連携・接続の取組	令和6年度の取組概要
[指定2年目] 研究校 (3校)	①～⑬の全取組を実施…3校 ⑭園所の行事への参観・参加 ⑮配布物での交流…2校 ⇒ 連携・接続の全ての取組を実施 (成果) ⇒ 幼児期の育ちと学びを意識した授業と指導の改善 ⇒ 子どもの学習意欲の向上と主体的な姿	幼保小の連携・接続の充実 (3年目) ↓ 持続可能な連携・接続へ 教育の質的向上へ
[指定1年目] 実践研究校 (11校)	①情報共有 ②半日入学 ⑬学校行事への参観…10校以上 ④合同会議(7校) ⑤日程調整会議(5校) ⑭⑮子ども同士の交流(8校)⑯交流の事前・事後協議(8校) ⇒ 幼保小の連携・接続の第一歩 (成果) ⇒ 幼保小の教員のつながりと保育・教育の相互理解 ⇒ 優しさや思いやりの心、自己発揮の姿 など	幼保小の連携・接続の推進 (2年目) ↓ 連携・接続の改善・充実 相互理解から授業改善
京都市全体 (158校) (14校含)	①情報共有 ②半日入学(90%以上が実施) ③スタカリ ⑮配布物の交流の順で多い(約60%) ⑭⑮の子ども同士の交流…半数の学校が実施(51%) ⇒ 中止していた交流の再開	幼保小の 子ども同士の交流が半数 ↓ 連携・接続の推進の必要性

3 京都市のアンケート調査(R5アンケート結果より)

○3研究ブロック(指定2年目)、実践研究校(指定1年目)の状況

- ・研究ブロック・・・先進的な取組を展開。全市を牽引。より充実・発展した取組へ。
- ・実践研究校・・・取組にばらつき。公開授業や公開保育、合同研修会、子ども同士の交流など積極的に実践。全市の一步先の取組を実践。

○全市の連携・接続の現状

- ・情報共有(書類以外)や半日入学が主な取組。
子ども同士の交流などコロナ禍によって中断されていた取組が再開(50%強)。
- ・地域・校区によって取組状況に格差
- ・全市的には取組は不十分

⇒ 全国と同様な課題

- ・京都市架け橋会議で各関係団体の意見集約と支援策の協議
「連携校園が不明確」「学校園によって取組に差」「組織的でない」「継続的でない」などの課題
- ・全市立小学校での架け橋プログラムの推進の必要性



○令和7年度から全市立小学校での架け橋プログラムの実施に向けて
『京都市の方針』の策定

◆京都市の幼保小の架け橋プログラムのねらい

- ・架け橋期は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期であると捉える。
- ・子どもに関わる大人が立場の違いを越えて自分ごととして連携・協働し、架け橋期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、保育・教育の質的向上を目指す。
- ・各小学校及び就学前施設の子どもや連携・接続の実態、地域や保護者の実態に沿って、架け橋プログラムの推進を図る。

◆全市立小学校での実施

- ・令和7年度から全ての市立小学校で幼保小の架け橋プログラムを実施する。
- ・連携・接続の範囲は、小学校区内を原則とする。
(小学校は自校の校区内に所在する就学前施設との連携・接続に取り組む。)

⇒ 地域ぐるみで進める連携・接続



◆新たなコミュニティの構築

- ・小学校及び連携する就学前施設の管理職や主任、担任等が普段から「子どもたちの保育・教育」について話ができる風通しのよい関係づくりを図る。

◆地域の目指す子ども像の実現に向けた相互理解と保育・教育の質の向上を図る

- ・京都市では、架け橋期のカリキュラムの作成を必須とせず、架け橋期の子どものためにじっくりと話し合い、理念を共有することを最優先させる。
- ・目指す子ども像やそれを実現するための教育活動の在り方の共有などの協議を重視する。
- ・相互理解のための保育・授業参観を伴う合同研修会や互惠性のある子ども同士の交流の充実などにより、保育・教育の質的向上を図る。

5 京都市の取組(R4～6年度)

R4年度	・架け橋コーディネーターの配置⇒研究ブロックへの指導助言 ・3研究ブロックの取組を全市に発信 ・幼保小連携・接続に関する教員・保育者への研修の充実(幼保小連携講座・管理職悉皆研修 等) ・研究ブロックの小学校・幼児教育施設の教員・保育者や対象の意識調査
R5年度	・本市の「学校教育の重点」、及び各校の「教育指導計画書」への架け橋プログラムの記載 ・専任架け橋コーディネーター(本市予算)の配置 ・各関係団体(※)の連携・接続についての意見を集約し、京都市架け橋会議で共有・協議。(R5のみ) ※私立幼稚園協会、保育園連盟、日本保育協会、小学校PTA連絡協議会、幼稚園PTA連絡協議会、市営保育所長会、小学校長会、市立幼稚園長会 ⇒本市方針の策定 ・研究ブロック、実践研究校における幼保小連携・接続主任の設置と成果・役割の整理、及び情報交換会の開催 ・公立小学校・幼稚園の管理職対象のアンケート調査 ・架け橋通信や保護者向けリーフレットの作成と配信・配布 ・保護者向け啓発講座の実施
R6年度	・幼保小連携・接続主任を全市立小学校・幼稚園に設置 ・幼保小連携・接続窓口担当者一覧の作成、全市小学校・幼児教育施設に配布(毎年更新) ・幼児教育施設向け「京都市の小学校教育概要動画」作成・配信 ・「幼保小連携・接続主任の役割」動画の作成・配信。 ・「京都市幼保小の架け橋プログラム手引き」作成・配布(R6のみ) ・京都市幼保小架け橋シンポジウム開催(R7.2.14 実施)

5 京都市の取組（京都市から配信・発行した資料）

～幼保小の子どもの学びと育ちをつなぐ～

架け橋通信



令和5年度 第1号
(令和5年6月発行)
京都市教育委員会 学校指導課
幼保小の架け橋プログラム担当
TEL:075-222-3746

幼保小の架け橋プログラムとは

「幼保小の架け橋プログラム」は、小1プロブレムのように移行期における課題のみに焦点を当てるのではなく、架け橋期（5歳児から小学校1年生の2年間）が子どもたちの学びや生活の基盤を育む重要な時期であることを幼保小関係者が共通認識し、子どもたちの学びと生活を接続していくことを目指すカリキュラムを双方が協力しながら構築していく全ての営みです。

文部科学省では、令和4年度から3か年程度を念頭に、全国的な架け橋期の教育の充実とともに、モデル地域における実践を並行して集中的に推進していくこととしています。京都市は、教育委員会と子ども若者はくみ局との連携のもと、特徴の異なる3小学校区を研究指定し、近隣の民間・公立園等の就学前施設と小学校で研究ブロック（御所南小学校・中京もえぎ幼稚園・ひまわり幼稚園・おいあした保育園・下京雅小学校・楊梅幼稚園・本願寺中央幼稚園・知真保育園・光林保育園・ゆりかごWECせいせん保育園・竹田小学校・竹田幼稚園・改進黨保育所）を構成し、それぞれの実態に応じた架け橋期のカリキュラムの開発や実践等に取り組んでいます。

【京都市の目指す方向性】

- 京都市では、小学校と就学前施設が、連携・接続の窓口を明確化して、幼保小の連携・接続を推進していきたいと考えています。
- 自校・園所の公開授業や公開保育など、教員・保育者が子どもの育ちを中心にした話し合いを通して相互理解を深め、連携・接続を実践し、架け橋期の教育の充実を図ることを目指しています。



架け橋プログラム 3研究ブロックの取組紹介

御所南小学校ブロック

交流活動「御苑で会おう」
1年生と就学前施設の5歳児が初夏の京都御苑で交流しました。小学生2名・園児1名のグループで追いかけてや仲良く遊びました。始めは緊張していましたが、遊び出すと互いを思う様子も見られ、最後には「また会おうね」と手を振り合っていました。

初めての交流活動の様子から教師が学び合い、御所南ブロックの「架け橋期のカリキュラム」の検証や改善を進めているところです。



下京雅小学校ブロック

スタートカリキュラムの工夫
1年生の教室前のエントランスには、楊梅幼稚園と同様に遊具で自由に遊んだり、友達と関わったりできる環境が整えられていました。

登校（先生が教室で待ってくれる）→持ち物の始末をする→主体的に遊ぶという一連の流れは、幼保でも経験した生活の仕方です。生活の仕方がわかり、少しでも友達と関わりがもてることがこの時期に大切にしたい「安心」につながる大きな要素です。



竹田小学校ブロック

教科とつながる交流活動
1年生の図画工作科「すなやつちとなかよし」において、1年生と幼保の子どもたちが一緒に砂遊びをすることで、刺激し合い、イメージを広げていました。幼稚園の砂場の用具（環境構成）や一人一人の子どもの様子に合わせて子どもと共に遊ぶ幼保の先生も子どもの意欲を引き出します。手や体全体の感覚を働かせ、様々な楽しみ、互いに刺激し合い主体的に取り組むなど互恵性のある交流でした。



架け橋通信

家庭と園で育もう

幼児期から小学校1年生への育ちと学び



京都市教育委員会 京都市立幼稚園長会

保護者向けリーフレット

今こそ聞きたい! 「非認知能力」を育む

乳幼児・小学生の子育て講座

参加費無料
定員 100名
(先着順)



託児あり
無料・要予約
先着 20名

〈演題〉どうする?子どもの「はじめての100か月」
～未来を創造的に生きる子どもを育むには～

Q: 今、世界で注目されている「非認知能力」って?
A: 積極性や粘り強さ、問題解決力、コミュニケーションなど個人の人生に大きく関係する力。非認知能力は、認知能力（読む、書くなどの知識や学力）の獲得にも大きく影響します。

Q: 非認知能力はいつ、どのように育まれるの?
A: 乳幼児期・学童期に育つ。『遊び』や『人とのかわり』を通して育まれます。

Q: 架け橋期（5歳～小学校1年生）の教育はなぜ大事?
A: 小学校教育は乳幼児期に育まれた能力を基盤として行われるもの。幼児期の経験を小学校教育につなぐことが重要です。

講師 京都市教育委員会 古賀 松香 先生

日時 — 令和6年1月20日(土) 午前10時から11時15分
会場 — 京都市子育て支援総合センター こどもみらい館 4階 第1研修室
対象 — 乳幼児・小学生の保護者・小学校・就学前施設の教育・保育に関わる方等

申込方法
令和5年12月1日(金)から受付開始(先着順) / 1月12日(金)締切
こどもみらい館のホームページから申込みください
▶お子様も一緒に参加いただけますが、就学前のお子様は、託児もご利用いただけます。
(無料・要予約・先着20名)
託児も同ページから申込みください。(託児の申込は12月25日(月)締切です)

動画配信のご案内
令和6年3月1日から講演の動画を配信予定(10分程度)



お申込みはこちらから
こどもみらい館



主 催 京都市教育委員会 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
お問合せ / 075-222-3806 (京都市教育委員会学校指導課)

保護者向け啓発講座(チラシ)

5 京都市の取組（担当窓口一覧表）

令和〇年度 幼保小連携・接続窓口担当者一覧									
行政区	小学校	施設名称	施設名称 ふりがな	住所	連絡先（TEL）	担当者役職名	担当者氏名	担当者氏名 ふりがな	備考
●●区	A小学校	A小学校				幼保小連携・接続主任			
		a 保育園				副園長			
		b 幼稚園				園長			
	B小学校	B小学校				幼保小連携・接続主任			
		c 保育園				園長			
		d こども園				主任			
▲▲区	C小学校	e幼稚園				主任			
		f幼稚園				園長			
		C小学校				幼保小連携・接続主任			
		g 保育園				主任			
		h 保育園				主幹			
	D小学校	i 幼稚園				幼保小連携・接続主任			
		D小学校				幼保小連携・接続主任			
		j保育園				園長			
		k こども園				園長			

イメージ

※京都市全行政区ごとに整理。担当者は年毎に変更する可能性があるので、一覧表は毎年発行。

5 京都市の取組(R4～6年度)

R4年度 ～	・架け橋コーディネーターの配置⇒研究ブロックへの指導助言 ・3研究ブロックの取組を全市に発信 ・幼保小連携・接続に関する教員・保育者への研修の充実(幼保小連携講座・管理職悉皆研修 等) ・研究ブロックの小学校・幼児教育施設の教員・保育者や対象の意識調査
R5年度 ～	・本市の「学校教育の重点」、及び各校の「教育指導計画書」への架け橋プログラムの記載 ・専任架け橋コーディネーター(本市予算)の配置 ・各関係団体(※)の連携・接続についての意見を集約し、京都市架け橋会議で共有・協議。(R5のみ) ※私立幼稚園協会、保育園連盟、日本保育協会、小学校PTA連絡協議会、幼稚園PTA連絡協議会、市営保育所長会、小学校長会、市立幼稚園長会 ⇒本市方針の策定 ・研究ブロック、実践研究校における幼保小連携・接続主任の成果と役割の整理と情報交換会の開催 ・公立小学校・幼稚園の管理職対象のアンケート調査 ・架け橋通信や保護者向けリーフレットの作成と配信・配布 ・保護者向け啓発講座の実施
R6年度 ～	・幼保小連携・接続主任を全市立小学校・幼稚園に設置 ・幼保小連携・接続窓口担当者一覧の作成、全市小学校・幼児教育施設に配布(毎年更新) ・幼児教育施設向け「京都市の小学校教育概要動画」作成・配信 ・「幼保小連携・接続主任の役割」動画の作成・配信。 ・「京都市幼保小の架け橋プログラム手引き」作成・配布(R6のみ) ・京都市幼保小架け橋シンポジウム開催(R7.2.14 実施)

6 京都市「架け橋期のカリキュラム」例

参考資料・事項

- ・文部科学省「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)」
- ・3研究ブロックの架け橋期のカリキュラム
- ・研究ブロック、実践研究校等の実践事例

京都市架け橋会議で協議・検討

京都市「架け橋期のカリキュラム」例 の作成

- ・小学校区を中心とした地域の幼保小の連携・接続を実現する上で考えられる一例
- ・各ブロックで作成する際に、あるいは作成までの間の参考として例示
- ・京都市「架け橋期のカリキュラム」例の解説も作成

京都市モデル版 架け橋期のカリキュラムの様式										小学校区(5歳児・1年生)					
共通の視点		5歳児・1年生													
① 目指す子どもの姿		架け橋期を通じて、どのような子どもを育てるか、育てたい子ども像を検討・決定する。													
時 期		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
② 発達の具体的な姿とその流れ		5歳児・1年生の発達を踏まえ、各々の発達にふさわしい主体的な遊びや学びへのプロセスをまとめる													
③ 園で展開する活動／生活科を中心とした教科等の単元構想		「目指す子ども像」の育成に向けて、園の活動と小学校の授業や活動内容のつながり・在り方を示す													
④ 指導上の配慮事項	教師の関わり	保育者や教師の関わりや環境づくりのポイントを示す													
	環境構成環境づくり														
⑤ 子どもの交流		互恵性のある交流を通した学びを深める。幼保小互いの教育に負担になり過ぎないように工夫する													
⑥ 教職員の交流		架け橋ミーティング以外に公開保育・授業参観等の計画を示し、互いの教育の理解に取り組もう													
⑦ 家庭・地域との連携		「目指す子ども像」について共有するとともに、連携・接続の意義や取組を発信する方法等を示す													

6 京都市「架け橋期のカリキュラム」例(5歳児)

京都市「架け橋期のカリキュラム」例(5歳児)

〇〇小学校ブロック (〇〇園)

① 立場を越えた大人同士で子どもが何に興味、関心をもち、育っているのかなど、地域の実態に添って、具体的に語り合うことで、子どもへの願いを共有して生み出すもの。

② 5歳児の発達の姿を見据え、発達にふさわしい主体的な遊びのプロセスを大切に子どもや地域の実態に添って考える。

③ 各校ブロックで話し合った「共通の視点」「目指す子ども像」に基づき、具体的な活動例については、各園で重点を定め、活動例を精選するなど、柔軟な対応を。また、活動の時期は、子どもの興味・関心と保育者の意図により一定ではないので、年間を通した書き方にしている。
ただし、3要領・指針に基づく「幼児教育の基本」や幼保小接続のキーワードとなる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して、活動内容を検討すること。

④ 保育者の関わりや環境構成のポイントを一般的に重要な視点で示している。各ブロックの子どもの実態に合わせて、重視すべき点を話し合い、より具体的に示すこと。

⑤ 交流は、取り組みやすい活動ではあるが、幼保小互いの教育の負担になりすぎないように年間計画を立てること。

⑥ 教職員の交流は、互いの教育を理解し合う上で、非常に有効な手立てである。特に幼児期の発達や遊びの中の学び、活動や環境に盛り込まれた保育者の意図や願い、環境設定や保育者の見取りなど、子どもの育ちに重要なことが保育には含まれている。小学校の先生にその重要性が伝わるように、保育を公開するなどして相互理解を進めること。

共通の視点													
① 目指す子ども像		安心感を基盤に、主体的に夢中に遊び(学び)、友達と関わりながら、自己発揮する子ども(小学校1年生と共通)											
時 期		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
② 発達の具体的な姿とその流れ		これまでの経験を生かしながら新たな課題を発見し、新しい方法を考えたり、試したりして表現しようとしていく時期											
		【安心(信頼関係・仲間の中での自信)】【成長(心が動く主体的な遊びや友達と共通のめあてをもって遊ぶ中での体験)】【自立(成長の自覚と1年生になる喜び)】											
		安心・安定した生活(信頼できる先生の存在・基本的な生活習慣や技能) →興味・関心に基付き心が動く「もの・人・こと」との出会いの中での主体的な遊び →仲間と共に繰り返し試行錯誤する中での気づき、発見、面白さの追求、挑戦、探究心、自己主張・折り合いなどの様々な心の体験 →友達と共通のめあてをもつ遊びや園生活での役割の継続性→自らの成長への自信と自立、1年生になる喜び											
③ 園で展開される活動		進級 誕生会(毎月) 保育参観 水遊び(プール)				園外保育・散歩(通年) 運動会 楽しい集い				作品展 生活発表会 卒園			
	*5歳児:幼児教育の基本を踏まえた遊びを中心とした総合的指導の中で行う *「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見取りつつ、1年間を通して、発達にふさわしい活動をコーディネートする	通年で行う活動(例)砂や水で遊ぶ/色水・石鹸・粘土などの感触遊び/絵の具で遊ぶ/リレーやおにごっこ/ドングリや落ち葉で遊ぶ/ごっこ遊びや表現遊びなど											
		〇興味・関心に基づく主体的な遊び 個人の挑戦・仲間との遊び・クラスみんなで遊ぶなど形態を変えて人と関わりながら夢中になる遊び(P.60)			〇体を動かすことへの興味や意欲につながる遊び 竹馬や縄跳びなど自らの挑戦、かけっこや団体競技など照い合う運動遊び、リズム遊びや表現遊びなど(P.56)			〇季節ごとの自然に触れ、栽培活動や生き物を育てる遊び、生活 生き物との暮らしや遊び・飼育・栽培・収穫パーティー・当番活動・園外保育など(P.57)			〇身近な地域とつながり、遊びや生活に必要な情報を取り入れたり、伝え合ったりする遊び 地域の人、もの、施設などにつながる体験、伝統文化体験など(P.58)		
④ 指導上の配慮事項	保育者の関わり	・年長児になった喜びに共感しつつ、一人一人の思いを受け止め、信頼関係を築き、安心して主体的、意欲的に遊べるように遊びの環境を構成していく。			・常に保育者の役割(幼児の理解者、共同作業者、共鳴する者、憧れのモデル、遊びや課題解決の援助者)を意識しながら保育を展開する。			・個々のめあてに挑戦する、友達と共通のめあてをもち遊ぶ、年長者としての役割を果たそうとするなどの5歳児の発達にふさわしい遊びや活動を支える。			・修了する自覚をもち、1年生になる期待を膨らませ、新しい生活に意欲的に向かえるように、幼児の気持ちを支え、自信につなげるようにする。		
		・自分の思いの実現や遊びの発展に配慮し、自ら、又は他者をつくる世界を楽しめる環境をつくる。(複数の幼児と一緒に遊べる広い場所・体の動きの調整が必要な遊具)			・幼児にとっての学びである遊びは、環境との関わりが深まることで充実するため、幼児が関わる環境(人、もの、出来事、時間、空間)のすべてが幼児にとっての教材となる。幼児の主体的な遊びを大切にしつつ、幼児の成長への願いや意図を環境に込めるようにする。								
	環境構成・環境づくり												
⑤ 子どもの交流		参考例) 「すなやつちとなかよし」(P.80,81) 「水遊び」				「運動会の交流」「あきみつけ」(P.82~85)				生活科「もうすぐみんな2年生」(1年生体験)(P.86~89)			
⑥ 教職員の交流		参観・連絡会		公開保育・授業		合同研修会		子どもの交流の事前・事後研修				入学児の連絡会	
⑦ 家庭・地域との連携		・5歳児の発達の姿や子どもの成長を伝え、保護者の支援をするとともに、幼保小連携・接続の意義を保護者や地域に発信する。											
		・入学に向けて、生活習慣の見直しや、子どもの成長をともに確認したりして、子どもとともに保護者の不安を軽減できるような働きかけをする。											

⑦ 小学校入学に伴い、教育のシステムが変わることへの保護者の不安は少なからず大きい。保護者の悩みや不安に寄り添い、架け橋プログラムの実践が保護者の不安軽減につながるよう幼保小連携・接続の意義や実践内容を保護者、地域に発信すること。



6 京都市「架け橋期のカリキュラム」例(1年生)

〇〇小学校ブロック

① 立場を越えた大人同士で子どもが何に興味、関心をもち、育っているのかなど、地域の実態に添って、具体的に語り合うことで、子どもへの願いを共有して生み出すもの。

② 5歳児の発達の様子を見据え、1年生の発達にふさわしい主体的な学び、自覚的な学びへのプロセスを大切に子どもや地域の実態に添って考える。

③ 前段は架け橋期のカリキュラムを考える上での重要な考え方を示し、後段は1年生の教科書から幼児期の遊びや活動とつながりの深い具体的な単元を挙げた。幼児教育の遊びや生活で体験した素地が各教科に組み込まれている。このことは、発達の似通った「架け橋期」を一体的に捉える意義を表していることを踏まえ、幼児期の体験、活動の手法が1年生での「主体的・対話的で深い学び」につながることを意識して各教科の単元を構想する。

④ 教師の関わりや環境づくりのポイントを一般的に重要な視点で示している。各ブロックの子どもの実態に合わせて、重視すべき点を話し合い、より具体的に示すこと。

⑤ 交流は、取り組みやすい活動ではあるが、幼保小互いの教育の負担になりすぎないように年間計画を立てること。

⑥ 教職員の交流は、互いの教育を理解し合う上で、非常に有効な手立てである。特に幼児期の発達や遊びの中の学び、活動や環境に盛り込まれた保育者の意図や願い、環境設定や保育者の見取りなど、子どもの育ちに重要なことが保育には含まれている。また、小学校で「主体的・対話的で深い学び」を目指していることをブロック内の幼保にも伝え、共に保育や授業の改善に生かすこと。

京都市「架け橋期のカリキュラム」例(1年生)

共通の視点														
① 目指す子ども像		安心感を基盤に、主体的に夢中に遊び(学び)、友達と関わりながら、自己発揮する子ども(幼保5歳児と共通)												
時 期		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
② 発達の具体的な姿とその流れ		自分の好きなことや得意なことがわかってくる中で、それ以降の学びや生活へと発展していく力を身に付ける時期 【安心(先生や友達への信頼感)】 【成長(主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業の中で)】 【自立(成長の自覚と2年生への期待)】 安心・安定した生活(新しい環境の中で信頼できる先生や友達と出会い、主体的に自己発揮し、学校に慣れ見通しをもつ。) ⇒学ぶことについての意識があり、各教科の学習内容について授業を通して学び、様々な活動を楽しむ(自覚的な学びの芽生え) ⇒学習活動を通して他者と関わりながら、自分の課題解決に向けて意欲的に学んでいく(自覚的な学びへの意欲) ⇒成長の自覚と自立(これまでの成長の確認とこれからの成長への期待)												
③ 小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構想等		*「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、幼児の発達や学びの様子を理解した上で、カリキュラムをデザインする。 *架け橋期の発達の特性を踏まえ、スタートカリキュラムの充実(生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫や弾力的な時間割の工夫)を図る。 *就学前施設と話し合っ授業づくりをする等、就学前施設での子どもの育ちと学びを生かし、より充実した授業になるようにする。 【幼児期の遊びや経験した活動を共有した単元例】 *基本的には、幼児期の遊びや生活で育まれた資質・能力は、すべての教科の素地になっている。 国語科 「おはなしききたいよ」 「なんていうかな」等 (P.66) 算数科 「わくわくすたあと」 「いろいろなかたち」等 (P.67、71) 音楽科 「うたっておどってなかよくなろう」「がっきとなかよくなろう」等多数 (P.68) 図画工作科 「ちよきちよき〜」「すなやつちと〜」「カラフルいろみず」等多数 (P.77) 体育科 「かけっこリレーあそび」「ゆうぐであそぼう」等「〜あそび」等多数 (P.73) 生活科:「いちねんせいがんばるよ」「あきとともだち」「もうすぐみんな2年生」等全ての単元 特別の教科 道徳: 幼児期の育ちが全ての教材の素地												
④ 指導上の配慮事項	教師の関わり	・安心を生み、成長、自立を支える人的な環境として、教師は、児童と一緒に活動を楽しみ、児童の様子を温かく見守り、児童の目線で話を聞くようにする。 ・一人一人の子どもの内面の理解に努めながら、自己肯定感を高め、よさや可能性を引き出す個に応じた適切な声かけや支援を行う。 ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図る。(資質・能力の育成を目指す、単元などのまとまりを見通し計画を立てる、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせ、より質の高い学びを目指す、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図る。)												
	環境構成・環境づくり	・入学当初は、幼児期の生活の流れを知り、遊びの環境をつくるなどして、児童が安心して学校生活に慣れ、活動できる環境づくりをする。(P.63、64) ・児童が主体的に学びに向かえるよう、活動に応じて、教室の空間づくりに工夫をするなど、十分に活動し、自己発揮できるように環境を設定する。 ・園における環境(教材)の工夫などについて、小学校でも適宜取り入れ、ICTも有効に活用しながら、架け橋期の教育の充実を図っていく。												
⑤ 子どもの交流		参考例) 「すなやつちとなかよし」(P.80、81)「なつとともだち」 「運動会の交流」「あきみつけ」(P.82～85) 生活科「もうすぐみんな2年生」(P.86～89)												
⑥ 教職員の交流		参観・連絡会 公開保育・授業 合同研修会 子どもの交流の事前・事後研修 入学児の連絡会												
⑦ 家庭・地域との連携		・半日入学など入学前から、子どもや保護者の不安が軽減できるような取組を工夫する。(P.62) ・幼保小連携・接続の意義を保護者や地域に発信する。												

⑦ 小学校入学に伴い、教育のシステムが変わることへの保護者の不安は少なからず大きい。幼保小の架け橋プログラムの実践が保護者の不安軽減につながるよう、幼保小連携・接続の意義や実践内容を保護者、地域に発信すること。

